特別企画

学生時代の思い出

第九がどうしても弾きたくて

医学教育学分野　**岡崎　史子**

私はビオラ弾きだ。

医学部のビオラ弾きは貴重な存在で、私はあちこちの医学部の定期演奏会にエキストラで出演していた。おかげで当時アマチュアがやるような曲はだいたい弾いていたが、唯一チャンスがなかったのが第九だった。第九は合唱団が必要だから、医学部オケではなかなか演奏されない。かといって、市民オケに入るほど医学生は暇ではない。卒業までに弾いておきたい。そうだ、第九をやろう。

私は第九のためだけにオケを作ることにした。

大学６年の５月12日に1500人収容の大ホールを押さえた。第九は年末と決まってるわけではない。キャッチフレーズは「五月に第九」そして、「関東学生のための第九演奏会」と銘打って仲間づくりを始めた。

オケのメンバーはすでにある人脈ですぐに集まったが、問題は合唱団だ。100人以上が必要となる。当時はネットもない時代。まずは関東にある大学に、片っ端から「合唱部御中」で手紙を出した。

「関東学生のための第九演奏会　合唱団員募集！」

じりじりと人は集まり、ついにオーケストラ・フロイデとコール・フロイデが誕生した。指揮者は藤岡幸夫さんだ。

私は本番のホールを押さえた直後に彼に手紙を書いた。藤岡さんは高校のオケのOBだが、故渡邉暁雄さんの弟子で、これからきっと世に出るに違いないと私は信じていた。謝金はそんなに出せない。でもどれほど藤岡さんと音楽をやりたいか、切々と訴えた。藤岡さんは二つ返事でオッケーしてくださった。

練習場の確保、ソリストも集めなければ。ソプラノは中学の後輩で桐朋音大に進んだ東実和、アルトはその後輩、テノールには慈恵医大の先輩、八反丸善文先生、バリトンは「ルポ精神病棟」の著者、大熊一夫さんが集まった。

そして、本番間近になったとき、大変な事態が起きた。

藤岡さんがプラハの春音楽祭の国際指揮者コンクールでファイナリストに選ばれたのだ。これは彼にとって初めてのコンクールだった。ファイナリストに選ばれたことで、本番には間に合うものの、直前の練習に、彼は全く参加できないことになった。

「史子ちゃん、悪い！」

彼のこれからを思えば、どんどん飛躍してもらわなければ。藤岡さんの指揮で第九を弾いた、それがきっと誇りになる日が来る。

５月11日、本番前日の最後の練習に彼はほぼ１カ月ぶりに駆け付けた。しかし怒号が飛ぶ。

「こんな演奏じゃなかったはずだ！お前らのすべてを出すんだ」

指揮台で、彼は立ち上がる。

「そんな音じゃ、俺は納得しない！」

「違う、そうじゃない！」

そして、５月12日本番。今でもあの感動をありありと思いだすことができる。会場と舞台と全部が一体となって、確かに歓喜に沸いたのだ。割れんばかりの拍手だった。ひとつ、成し遂げた。打ち上げの時、藤岡さんが本番で使ったタクトをくれた。

「やるよ。よかったな」

それは今でも実家に、配り切れなかった20枚ほどの当日のCDと共に置いてある。CDはいまだに聴くことができていない。

いまや藤岡さんは人気指揮者となり、評価も確立、テレビや雑誌でもよく見かけるようになった。そして今も私は、あの時の「成し遂げた」と心底思えた、そんな仕事をしたくてカリキュラム改革に奔走している。人間たいして成長しない。

学生時代の思い出

「ボート部の朝練」

形成外科学　松田　　健

形成外科学講座教授の松田健と申します。私は奈良出身のベタベタの関西人で、1990年に大阪大学に入学、６年間の学生生活を大阪で過ごしました。当時の医学部のカリキュラムは、現在の綿密に組まれたものに比べれば随分おおらかであったと思います。出席をとる講義も少なく、著名な教授陣の講義もそこそこに（今となっては随分もったいないことをしたものだと思いますが）部活動に勤しむ日々でした。当時私はボート部に所属していたのですが、その時のエピソードをひとつ。

ボート競技は１人漕ぎから８人漕ぎ、舵手（舵取り）つき、舵手なし、スカル（一人で左右２本のオールを持つ）、スイープ（左右どちらかの１本のオールを持つ）と、いろんな組み合わせで多くの部門がありますが、医学部系のチームは部員も少なく、４人漕ぎ＋コックス（舵手）の「舵手つきフォア」がメインとなります。

クルーの編成は年明けに発表され、８月の西医体を目指し５人のクルーはそのシーズンを共にします。新潟では信濃川沿いのやすらぎ堤に立派な艇庫がありますが、当時の我々は大川（大阪の夏の風物詩である、天神祭の行われるところです）沿いにある、大阪市の古い艇庫を間借りしていました。都会のど真ん中（？）、艇庫の向かいは◯ブホテル街というような、なかなか刺激的な環境の中で練習をするわけですが、都会の川で川幅も狭く、多くの船が行き交い、練習環境としてはあまり良くありません。対策は「船が行き交う時間帯の前に練習する」、つまりすごく早朝に練習するのです。５：30に集合し、陸上でウォーミングアップ、６：00に出艇、７：00過ぎに練習を終える。こうすることで川が混み合う前に効率的に水上の練習（乗艇といいます）を終えられます。医学部のキャンパスと艇庫は離れており、車で40-50分程度はかかる距離でした。つまり、４時台に出発、５：30に５人のメンバーが誰一人欠けること無く艇庫に集合しないと乗艇できないのです。「そんなの、お互い連絡取り合うようにすればいいじゃん」と

思ったあなた、当時は携帯電話が無かったのです。下宿にいればそこの固定電話に出ることはできますが、移動中は連絡がつきません。５：45頃になっても現れないメンバーへの唯一の連絡手段は艇庫の最寄りのディスカウントストアー（◯ブホテル街の中）の公衆電話から電話するのです。

① 電話にでない→「きっとこちらに向かっているのだろう」と期待して待つ
② 電話にでる→「あっ…おはよう。みんな集まってるけど…。」

② の場合、「あっ」の瞬間、下宿の電話に出ている→今から頑張っても間に合わない→本日乗艇不可→陸上で筋トレか、ランニングか、エルゴ（ボート漕ぎマシーン）練習　が決定、という具合です。

電話担当者は「○○君が寝坊した」と艇庫で待つクルーに報告、「お互い？今度は気をつけよう」となり、その後陸上練習を行います。

そう、今となっては少し想像し難いかもしれませんが、携帯電話がなければ「今、どこ？」を知ることはできないのです。「ちゃんと起きたか？」と４：30頃に電話するようなことをやってみたこともありましたが、実家から通っているメンバーがいたり、「起きとるわ！」と逆ギレ気味になることもあり、長続きしませんでした。（今ならまずLINEすればいいんでしょうけど。）でも、多少の個人差は有りましたが、寝坊の常習犯となる者はほぼゼロで、みんなきちんと５：30に集合するようになります。責任感というか、緊張感というか、連帯感というか。様々な学年の混ざった５人のクルーは８月の西医体まで、長い時間を共に過ごします。練習のメニューはコックスが責任を持って計画します。コックスは監督かつコーチ、かつ試合での総指揮官の役割があるのですが、最高学年と限らず、時に下級生が上級生に厳しい指導をしたり、これがまたなかなか面白いところでもありました。

ボート部の活動は試合での勝ち負けはもちろん、それ以外にでも、本当に良い思い出です。あれから30年以上経ちましたが、あの思い出を共にした先輩、同級生、後輩とは未だにあの時の話で盛り上がれますし、今も各方面で華々しく活躍するボート部OBに様々な形で助けていただくこともしばしばです。

私の学生時代の大部分を占めていた部活動、一生の宝物になりました。皆様の学生生活がたくさんの縁と素敵な思い出で満たされますよう、心より願っております。

学生時代の思い出

ーめしと酒の記憶ー

整形外科・リハビリテーション学分野
教授　川島　寛之

自分の学生時代を振り返り、食事や飲み会でお世話になった店々のことを思い出してみることにしました。当時、仲間と通った定食屋、居酒屋、カラオケ――それぞれに味があり、雰囲気があり、そして何より、そこに集った人々との時間がありました。記憶のみに頼って綴るため、事実関係に誤りがあるかもしれませんが、その点はどうかご容赦いただければ幸いです。

「五十嵐キャンパス時代」

私は1990年に入学し、当時は教養課程（通称「医進」）が２年間だったため、五十嵐キャンパスでその期間を過ごしました。学生時代を振り返ると、あちこちの居酒屋やカラオケ店に足を運んだ記憶がよみがえります。

私は１年生の頃から東堀に住んでいたため、五十嵐に住んでいた友人宅にしばしば泊めてもらっていました。中門（旧正門）の前にあった、知る人ぞ知る「とんかつかねこ」では、仲間とともに大騒ぎした記憶があります。記録も残ってはいるのですが、そちらは門外不出ということでご容赦ください。

現・万人家の裏手あたりにあった「焼肉ロッヂ」も、学生に優しい価格で食べ放題を楽しめる店だったと記憶しています。広大な五十嵐キャンパスは、当時「五十嵐砂漠」と呼ばれていましたが、第一食堂（１食）から第三食堂（３食）までの学生食堂には大変お世話になりました。昨年、約35年ぶりに１食でランチをいただきましたが、メニューこそ変われども、雰囲気は昔のままで、とても懐かしく感じました。

西門から越後線方面へ降りていく坂の途中には「新川」という居酒屋があり、頻繁に通っていた時期には週に２回ほどお世話になっていたように思います。キャンパスから少し離れますが、西大通り（旧116号）から西総合スポーツセンターへ向かう坂の途中には「WIND」という定食屋がありました。仲間と車を乗り合わせて行ったのですが、現在のエクセラン美容室がお店だったと記憶しています。

なお、正門近くにある韓国料理店「コッテジ」には、最近も時折足を運んでいるお勧め店です。

今の医学科５・６年生に五十嵐キャンパスの思い出を尋ねると、「ほとんど記憶がない」との声が多く聞かれます。ちょうどCOVID-19パンデミックの時期にあたり、授業が遠隔で行われていたことも影響しているようです。

「旭町キャンパス時代」

当時、キャンパス内にはいくつもの食堂がありました。病院内には一般向けの食堂のほか、職員用の地下食堂や歯学部の食堂もあり、旧池原会館には１階の食堂と２階の喫茶スペースが設けられていました。学生や職員がそれぞれの立場で利用していた、懐かしい空間です。

キャンパスの外にも、個性豊かな店が数多くありました。私の記憶に残る代表的な店としては、学校町の「キャリコ」、古町の「ロッヂ」、西大畑の「湖畔」、そして「BON赤ひょうたん」などが挙げられます。いずれも、仲間と語らいながら食事を楽しんだ、思い出深い場所です。

夜になると、安兵衛などの居酒屋チェーン店はもちろんのこと、古町では「おでん屋じゅんちゃん」や、その近くのバー「Nuant and K」、元祖「きんしゃい亭」などにも、しばしば足を運びました。店名は思い出せませんが、いくつかのスナックにボトルキープしていたこともあり、当時の自分の背伸びした気分が懐かしく思い出されます。学校町の焼肉店「大猿」や「わかさや」「亀万」などの定番店にも、部活動の仲間と連れ立ってよく通いました。

「最後に」

学生時代にとてもお世話になったものの、どうしても店名が思い出せない店があります。現在のアイン薬局医学町店（有壬記念館の脇）にあった、もともとは旅館だった建物で、座敷に上がっていただく魚定食がメインのランチを提供してくれる店でした。おばあちゃんが切り盛りしていて、家庭的で温かい料理を出してくださり、私は足しげく通っていました。同級生に尋ねても、ネットで調べても店名がわからず、もどかしい思いをしています。もしご存じの方がいらっしゃいましたら、ぜひご一報いただければ幸いです。

こうして学生時代の食生活を振り返ってみると、お世話になった店の多くがすでに閉店してしまっており、寂しさを覚えます。そんな中で、学校町にある「わかさや」は、学生時代から変わらずご夫婦で営まれている居酒屋で、今もなお営業を続けておられます。近いうちに時間を見つけて、おいしい酒と肴をいただきに伺おうかと思います。